



1 サムエル記12章

老人サムエルのことば

1ヶGIL12: 老人ヶGILのことば

2019.2.25

主を恐れ仕えよ 憲:王と云 主が証人(等々)の歴史

サムエル: 正しいお"き

12

[illegible]

(律法を宣け)

④ 2차원 배열

主を恐れ仕ふ

サエル:
あめみ

玉球. 大いなりこと (雲と雨)

それゆ 12

二六三二

14-15 仕	6-13 主 善	1-5 甘美ル正
24-25 仕	20-23 甘美ル正	16-19 主 現

相東

由31: E-セアとゆ日のことは
座-律法 / 約束の地

14612:

王が王. / 正しいは王を 王. (王の王. とし)

(庚)

×悪・罪 見捨ない

(主・現人)

「サムエルは年老いて髪は白くなった」というところから始まります。ここは、3つずつに分けられるでしょう。特に、14節、15節と24節、25節を見てください。「主を恐れ、心を尽くして主に仕え、その声に聞き従い、王様も共に」と、王様と一緒にこの命令を守るようにと言われてる感じです。24節、25節も「ただ主を恐れ心をつくして主に仕え。悪を行うならば、あなた方も王も共に滅ぼされる」ということで、この24節、25節と14節、15節が、「主を恐れて主に仕えよ」ということで似ていますので、1節から15節まで、16節から25節までと2つに分けられるということで段が分かれています。

7節「それゆえ、あなたがたは今立ちなさい」と16節「それゆえ、今あなたがたは立ちなさい」ということで、16節から始まる一つの段落と、6節から始まる13節までの段落に分かれます。「主を捨てて罪を犯してまた悪を行っている」ということが、13節の終わりのところで言われていますけれども、19節のところにも同じように「罪を犯して王を求めて悪を加えました」ということが書かれていますので、この6節から13節と16節から19節が並行しているだろうと。

それと1節から5節と20節から23節は、サムエルが自分について話しているところなので、そこも並行してるでしょうということで、3つずつに分けて並行していることを見ました。

サムエルはエリの息子たちのようではなく正しい裁きを行いました。「あなた方は証ししますね」と言って、証ししますということを話します。「主が証人です」と言って導きの歴史を話します。

導きの歴史の中で、他の神々に仕える。主を忘れて他の神々を恐れる。主を呼んで救われたのに…という導きの歴史が証人、証拠として言われます。「それなのにあなたがたはを王を求めた」。16節のところから「大いなる事を見なさい。雷と雨を下します。」と言った通りに、そこでその奇跡が起こるわけです。主を呼ぶと答えが来ますということです。

その主の現れが王になることなんですけども、証人なのですね。主が証人です。16節からも「主が証人です」と言うことが語られて、だから「恐れて仕えなさい」ということなのですが、「恐れるな」というところから始まります。恐れることはありません。心を尽くして主に仕えなさい。悪を行なったけれど、悔い改めなさいということなんですけれど、ここは「サムエルは絶対にあなた方を捨てません。主は捨てない。私も捨てません。」ということで「祈ることをやめて、罪を犯すようなことはありません」ということで、「決して私は見捨てない、主が見捨てないように」というこの憐れみの裁きをしているということが、ここで言われてるのだと思います。

正しい裁きをして、憐れみの裁きをするということなんですけど、この上の段が、今までこうでした。それを覚えて主に仕えなさい。そしてまた約束をしてくださるのですね。「主ご自身が現れて憐れみの裁きを与えますよ」ということで、下の段で約束してくれるところという大きな違いがあるんだろうと。

[illegible]

この形を見ると、モーセが年老いた時のことばに似ているように見えます。申命記31章で誓った地に入れると「国々を恐れるな。律法に聞き従いなさい。」と雲の柱が現れて、神様が証ししてくれるわけです。

「証しの歌を歌え」と言って証しの歌を相続として与えてくださいます。それで「律法を守りを行いなさい」という、「律法と約束の地」ということがこのモーセの死ぬ日のことばに書かれていますけれど、それに対してサムエルは、この主が王であるのに、主を退けたということと、正しい裁きをしたそのサムエルですね。サムエルは正しい裁きをして、憐れみ深い王でとりなしをするにもかかわらず、サムエルを退けた。

11節にエルバアルとバラクとエフタとサムエルというさばきつかさがありますね。このさばきつかさをつかわしているのに、そのさばきつかさを退けているということは、主を退けているということの表れですよということが言われています。主が王である。そのしもべが正しい裁きをしているというサムエル記の方は、支配者、王様側について話している。

31章の申命記の方は、その律法のことば、神様の教えのことばを契約の箱ですから、御座から教える感じです。その御座から教えることばに聞き従って相続を得なさいという「相続地」の話が中心で、サムエル記のサムエルのことばの方は、「王が与えられること」についての話が中心になっている最後のことばということだと思います。

申命記31章の方は、この誓った地に導き入れる「強くあれ、雄々しくあれ」とヨシュアに言います。相続地の話をしてヨシュアに言いますというこの2つの箇所が似ていますが、サムエル記12章の方も「主を恐れて主に仕える、主を恐れて主に仕える」まるでヨシュアみたいです。主を恐れます」ということを言っていることばが平行している。

その主の声に聞き従う。律法に聞き従うことも思い出すような言い方が、14節と24節にあって、老人になったサムエルが、憐れみ深い王を与えて、その憐れみ深い王によって、イスラエルが導かれていくということを、この最後に誓わせているというような箇所だと思います。